多摩都市構想研究会等　第二回茅野市視察　報告書

令和 3 年 11 月 14 日(日)～15 日(月)

当会参加者）　古川勇二顧問、櫻井巌会長、飯田哲郎副会長、菊地輝雄事務局長

視　察　先）　ワークラボハヶ岳、公立諏訪東京理科大学、ワークラボチェルトの森

宿　泊　先）　テラス蓼科

共同視察者）　たちかわ IT 交流会、協同組合 TDR　総勢 10 名

昨年度(2020 年 3 月)、茅野市のワークラボハヶ岳の視察を企画したが、訪問当日になり中央線の信号故障のため、当時の古川会長、櫻井顧問は訪問を途中断念した経緯がある。菊地事務局長は、茅野市長とのアポがあったため先行訪問していた飯田理事に同行し翌朝茅野市を訪問した。

今回は、前記共同視察者の訪問企画があり、コーディネーターの森ビル矢部氏のお許しを頂き、昨年度視察予定の 4 人で改めて訪問することができた。特筆すべきは、駅前ワークラボの外に、同市内３箇所の別荘地でのワークラボが展開され、独自の異業種交流が芽生えていることである。

今回の視察を踏まえて、今後、茅野市のまちづくりや多摩地域との交流発展の動向を注視しつつ、働き方改革、地域振興を支援し、紹介していく。

1　視察スケジュール

11 月 14 日(日)

(1) ワークラボハヶ岳

茅野駅につながるビル内にある「ワークラボハヶ岳」を訪問。同施設は、オープンデスク、ドア付きデスク、個室、会議室、交流空間、ポスト、ロッカー等で構成されており、現在は満室である。たちかわ IT 交流会は、ここをワーケーション拠点にして活動している。今回の訪問を機に諏訪東京理科大との交流拠点としても活用されることになり、ワーケーションに加え交流拠点としての効果が期待できる。詳細は、前回視察の資料を参照してください。

(2) セミナー「ウエルネスな〈食〉を蓼科で考える」

講師：地産地消料理研究家　中村恭子氏

① 講師紹介　　東京都から茅野市への移転の経緯
② 地産地消観　身土不二：安全安心、環境に配慮した食生活の実現を目指して
③ 都会からの別荘オーナー、ワーケーション企業、茅野市への訪問者への穏やかな食の実践的提案
④ 「茅野市のウエルネス事業」との協働
⑤ 蓼科で実践するウエルネス食の紹介

⑶ 昼食（音無しの湯）　中村講師企画の食

豆腐前菜、そば、季節の野菜の天ぷら、
おからケーキ、コーヒー

⑷ ワークラボ「チェルトの森」、ワークラボ「蓼科高原」見学

「ワークラボハヶ岳」を皮切りに、次々と別荘地にワークラボが展開されてきた。

⑸ ホテルチェックイン「夕食　懇談会」

遅ればせながら、視察メンバーの名刺交換を行い、今後共の交流を約した。

11 月 15 日(月)

⑴ 蓼科湖周辺視察

⑵ 公立諏訪東京理科大学訪問　渡邉教授・産学連携センター長

同大学の紹介

ⅰ　1990 年　短大として創立

ⅱ　2002 年　諏訪東京理科大学　学生の構成　当初県民８：他県２

Ⅲ　2018 年　公立化　学生構成の変化　　県民２：他県８

① 東京の本部(東京理科大学)の影響はなくなったが、設置者である 6 市町村への貢献が課題となっている。

先端的な知識･技能の教授が目的であると同時に地域への貢献が大事である。

② 学生は、一学年 300 人で合計 1,200 である。就職先は、中部圏及び東京圏に分かれる。学生のアルバイト先がないことが一つの悩みである。車を持っているかないかでアルバイト先も変わってくる。大学への交通の便はよく、学生は駅、インター・本学周辺に住んでいる。

③ 今後、たちかわＩＴ交流会の企業への就職も視野にいれながら、アルバイト先の紹介など交流を深めたい。

⑶ 茅野市の地域創生について（市役所地域創生課長　小池俊正氏）

① 茅野市の紹介

② 茅野市の今後の方向性

ⅰ　第２次茅野市地域創生総合戦略「若者に選ばれるまちの実現」
　日々進歩する先端技術を活用し「市民目線」で暮らしやすいまち

ⅱ　茅野市「スーパーシティ」構想
　「３つの市民」（地元市民、別荘市民、交流市民）で守る地域のアイデンティ。
　別荘市民は１万世帯？課題は交流市民にとっての魅力や交流の敷居を低くすること、さらには情報の積極的な発信だと感じた。

ⅲ　茅野市ＤＸの進め方

市からのご説明のあと種々意見交換があった。

⑷ 古民家での昼食

視察の最後に、古民家を食堂兼売店にしている店で昼食をとった。交流市民や別荘市民への魅力づくりの一つの取り組みである。